
緑の冠

黒木露火

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

緑の冠

【著者名】

黒木露火

【あらすじ】

改稿のため、2011年5月1日を以て、本編と番外編の一部を削除しました。

【空想科学祭2009参加作品】

番外編 黒猫日和（前書き）

せっかく来ていただいたのに、本編削除中ですみません。
どうしても読みたい方がいらしたら、拍手していただけだと何かい
いことがあるかもしません。

「『きげんアニマルパジャマ』とは、とあるおもちゃメーカーが販売している着ぐるみ型のパジャマである。

毛布のように起毛した保温性に富む布地で出来ており、乳児がよく着用しているロンパースの「ごとく上下ひと続きで、前面のファスナー」で脱着する。

頭部にはそれぞれの動物を模した耳つきのフードがついていて、背面にはしっぽもついている。

フードにつけられたセンサーによって着用者の感情を読みとり、それらの耳としっぽは動くのだ。

「 といっても、所詮おもちゃレベルだから、大雑把なものらしいわ」

クリスが猫屋敷の正式な住人になって、しばらく経つたある日の午後のこと。

先日いじめすぎたお詫びと仲直りのしるしに、ヒアリスの持参したプレゼントの包みを開けたクリスは、当惑したような顔で一人の保護者たちのほうへ振り返った。

「 着てみたら？」

真後ろを向いてソファの背にあごをのせ、ダイニングテーブルの前のクリスとアリスを眺めていたコーディンが、面白がって勧める。半身をひねつてクリスたちを見ていたトーマスは、咎めるような一瞥を隣のコーディンに投げた後、クリスにはにこやかに微笑みかけた。

「 嫌なら無理に着る必要はないんだよ」

「 イヤとは言つてないじゃないの。ねえ、クリス？」

身を屈め、背の低いクリスの顔を覗き込むアリスの耳元で、細長い金色の耳飾りが揺れた。白いスーツの胸元は深く切れ込み、大人の男でなくともその奥へとつい視線を誘われる。

最初会ったときは怖い印象だったが、いつやつて改めて見ると、綺麗な女人だとクリスは思った。

「大きめのを買つてきたから、服の上からでも着れるでしょう。見て見せて。きっと可愛いわよ」

アリスはパジャマをクリスの前に当て、ほら、とこうようにソファの男二人を向かせた。

トーマスが見る限り、それは作業着のツナギに似た黒一色の服で、特に可愛いというものでもない。

「……カワイイ？」

クリスは無表情にアリスの言葉を繰り返す。

「着てみろつてクリス、絶対可愛いから！ 君もそう思つだろ、トーマス君？」

使用後の姿を想像しているのか、だらしなく笑み崩れるコーディンに「ただの黒いツナギじゃないですか」などと反論する気にもなれず、「そうですね。きっと可愛いでしょうね」と、トーマスはおぞなりな相槌をうつた。

「着てみるよ」

言うが早いが、クリスはアリスからパジャマを受け取つた。前面のジッパーを開き、中にもぐりこむようにして着こむ。仕上げに、アリスが電源を入れたフードを被せた。

くたつていた三角の耳は、数秒後、少し伏せられた状態で立ちあがつた。後ろについている長いしっぽが不安げにゆつくりと揺れている。

フードから覗くクリスの表情は変わりなく無表情で、瞳だけが大きく見開かれている。

「黒猫クリスだ。可愛いなあ」

コーディンがたまらないといった風に呟く。

「私の見立ては完璧さよ。どう？ 可愛いでしょうね？ デイー」

黒い子猫の肩に手を置き、アリスはトーマスに向つて誇らしげに

片眉を上げた。

「これは可愛いなあ。クリス、似合つてるよ」

田を細めたトーマスがそう言ったとたん、クリスのパジャマの耳としつぽがぴんと立ちあがった。しつぽなど、歓喜のあまりぶるふると震えているほどである。

しかし、フードの中のクリス本体の表情は、あまり変わりない。よく見れば、鼻の穴が広がり、口角も微妙に上がっているのだが。「すっげえ嬉しそう、クリス」「よっぽど気にいったんですね、あのパジャマ」「喜んでもらえてよかつた。あなたたちの分も忘れてないわよ」トーマスとコーリンが囁き合っているのを見たアリスが、企むようになにか笑つた。いつの間にか、クリスに渡したものよりも一回り大きな包みを二つ持つていて、それを見た男二人は、慌てて後ろ向きだった姿勢をもとに戻す。

「まさか……」

「あの師匠なら、当然やるだろ」

「僕は絶対に嫌ですからね」

「俺に言つなよ」

腕組みをした肩を竦めるトーマスに、ソファにもたれかかったコーリンがぼやく。

「クリスならいいですよ。まだ子どもだからああいうのも似合つし、可愛い」

「訂正しろ、トーマス君。クリスは子どもだから可愛いんじゃない。もともと可愛いし、大人になつても可愛いに決まつている!」

トーマスのほうに向き直つて力説するコーリンと、横を向いて聞き流すトーマスの間に、黒い子猫のままのクリスがちょこんと座つた。立ち上がつたしつぽが興味深そうにゆらゆらと揺れている。

「何の話?」

「もちろん、どちらがこの『じきげんアーマルパジャマ』を上手く着こなせるかっていうお話をよね?」

ソファの背後から伸びてきた手が、ユージンとトーマスの前に一
つずつ包みを置いていった。

もう一つのソファを一人で独占し、くつろいだ様子で足を組んだアリスが「開けてみて」と促す。

ユージンはおとなしく包みを開け、クリスと似たようなそれを着るために黙つて立ち上がつたが、トーマスは憮然として腕組みをしたまま動かない。

「聞こえなかつた？ 開けてみて、と言つたのよ？」

「聞こえましたよ。自分の耳が遠いからって、他人もそうだと思わないください」

「せっかく持つてきてあげたのに。他人の好意を無にするつもり？「好意と言うなら、まず自分が着たらどうなんですか、この『じきげんアニマルパジャマ』」

アリスとトーマスの間でどんどん張り詰める空氣とともに、ぴんと立つていたクリスの耳としつぽはしおたれていく。

「いやあよ。だって私のスタイルじゃないもの」

「僕のスタイルでもないですよ。こんなもの、好きこのんで着る大人がどこにいるつていうんですか！」

「ここにいるわよ。ほら」

アリスの指さす方向には、『じきげんアニマルパジャマ』黒猫タイプ・大人用をフードまで着用したユージンがいた。

「これ、あつたかくて軽くてすごくいいよ。ありがとう、師匠！」

大きな黒猫の耳としつぽは、嬉しそうに立つている。

照れもせず、それなりに着こなしてはいるが、大人だからなのか美形ゆえか由来のはつきりしない微妙な違和感はぬぐえない。

「オーカス、あなたつて最高！」

「実用性が高ければ何でもいいんですか、あなたは……」

アリスは笑いをこらえるように肩を震わせ、トーマスは呆れるよう額に手を当てる。

「おそろいだね」

ソファから立ちあがつて大黒猫に抱きついたクリスのしつぽと耳もまた、嬉しそうに上を向いている。

それを見たトーマスは、お茶を淹れるために立ちあがつた。今日はまたたび茶にするべきだらうか、と思案しつつ。

了

番外編 黒猫日和（後書き）

拍手に置いていたS.Sです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8782h/>

緑の冠

2011年7月9日03時12分発行